

大覚寺



大沢池の西側に大覚寺がある。
まず目に飛び込んでくるのは大覚寺の宝塔である。

(<https://www.cyber-world.jp.net/daikakuji/> による)

大覚寺を特徴づけるものといえば、この大沢池と宝塔であろう。

大沢池（おおさわのいけ）は、大覚寺の東に位置し、周囲約1 kmの日本最古の人工の林泉（林や泉水などのある庭園）である。嵯峨天皇が離宮嵯峨院の造営にあたって、唐（中国）の洞庭湖を模して造られたところから、庭湖とも呼ばれる。

宝塔は、正式には心経宝塔（しんぎょうほうとう）といい、昭和42年（1967）、嵯峨天皇心経写経1150年を記念して建立される。基壇内部に「如意宝珠」を納めた真珠の小塔を安

置する。宝塔内部には弘法大師尊像を祀る。大沢池のほとりに位置し、嵯峨野の四季の風景にとけあった朱塗りの端正な姿が美しい。

では、大覚寺の公式ホームページをご覧ください。

https://www.daikakuji.or.jp/event_season_autumn/

盛り沢山というか内容の濃いホームページであるので、少し長くなるが、逐次大覚寺の公式ホームページの内容を紹介していこう。

まずはじめに、大覚寺の経緯である。

延暦13年（794）、桓武天皇は「山背」を「山城」と改め、新都・平安京に遷都する。桓武天皇ののちに即位した平城天皇は、病身のため弟の嵯峨天皇に在位わずか3年で譲位するが、平城上皇の平城古京への復都、薬子の乱などの政変によって政局は動揺していた。遷都から15年、大同4年（809）に即位した嵯峨天皇は、律令よりも格式を中心に政治を推し進め、ようやく平安京は安定をみる。一方で嵯峨天皇は、都の中心より離れた葛野の地（現在の嵯峨野）をこよなく愛され、[檀林皇后](#)との成婚の新室である**嵯峨院**を建立、これが**大覚寺の前身・離宮嵯峨院**である。

嵯峨天皇は、唐の新しい文化を伝えた入唐求法の僧侶たちにも深く帰依された。その代表が弘法大師空海であり特に恩寵を賜り、弘仁7年（816）には高野山開創の勅許を得、同14年（823）には東寺も下賜され、真言宗の立教開宗に至った。弘仁9年（818）の大飢饉に際して嵯峨天皇は、弘法大師の勧めにより一字三礼の誠を尽くして般若心経を浄書され、その間、檀林皇后は薬師三尊像を金泥で浄書、弘法大師は嵯峨院持仏堂五覚院で、五大明王に祈願した。このときの宸筆・般若心経は、60年に一度しか開封できない勅封心経として現在も[大覚寺心経殿](#)に奉安されている。

嵯峨院が大覚寺として再出発することになったのは、貞観18年（876）である。嵯峨上皇の長女で、淳和天皇の皇后であった正子内親王が、淳和天皇第2皇子の恒寂入道親王を開山として開創した。

その後、延喜年間（901～923）になると、宇多法皇がしばしば行幸して詞宴を催すが、恒寂入道親王の後、3代定昭より20代良信までの約290年間[興福寺一乗院](#)の兼帯が続く。

一乗院による兼帯後、文永5年（1268）、後嵯峨上皇が落飾して素覚と号し、第21代門跡となる。

また、後宇多天皇が徳治2年（1307）に出家し法皇となり、法名を金剛性と号し大覚寺に住して第23代門跡となる。

この時、皇位が皇統や所領の継承をめぐって2分され、亀山・後宇多の皇統は、後宇多法皇が大覚寺に住したことにより大覚寺統（南朝）と称されることとなる。法皇は大覚寺の再興に尽力され、次々と伽藍の造営に努められたので「大覚寺殿」と称され大覚寺のご中興とされる。

しかし、第24代性円門跡の時代、延元元年（建武3年・1336）火を発してほとんどの堂舎を失ってしまう。

元中9年（明德3年・1392）には南北朝媾和が大覚寺正寝殿で行なわれ、南朝の後亀山天皇が北朝の後小松天皇に三種の神器を譲って大覚寺に入った。しかし、和議の条件が果たされなかったため、応永17年（1410）、後亀山上皇の吉野出奔以後、南朝の再興運動が起こり、大覚寺もこの運動に深く関わっていく。

戦国時代に入り、応仁2年（1468）、応仁の乱によりほとんどの堂宇を焼失。

天文3年（1534）からは東山の安井門跡蓮華光院を兼帯するが、天文5年（1536）にも木沢長政勢により放火されている。

天正17年（1589）、空性を門跡に迎えた後、衰退した大覚寺の再建にとりかかり、寛永年間（1624～44）には、ほぼ寺観が整えられた。

最後の宮門跡は、江戸時代後期・天保8年（1837）に門跡に就任された有栖川宮慈性入道親王である。大正13年（1924）、第48代龍池密雄門跡が心経殿を再建。

また大正天皇即位式の饗宴殿を移築し、御影堂（心経前殿）とした。

最後に、大覚寺は、いけばな発祥の花の寺であり「嵯峨御流」の総司所（家元）である。嵯峨天皇が、嵯峨院を造営した際に作庭した現存する日本最古の庭池「大沢池」の菊ヶ島に咲く野菊を手折り、器にいけ「後世、花を賞づるもの、宜しく之をもって範とすべし」と述べられたのをはじまりとする。

大覚寺境内の様子は次をご覧ください。

<https://www.daikakuji.or.jp/precincts/>



勅使門

上で紹介した7番が勅使門だが、勅使門についてはこんな話がある。

世は尊王攘夷が叫ばれる混迷の時代、あろうことか有栖川宮慈性門主は幕府から勤皇討幕の疑いをかけられ、大覚寺は宗祖を弘法大師と仰ぐ真言宗の寺院であるにもかかわらず、宗派の違う天台宗の徳川家菩提寺、江戸の輪王寺の住職を兼務するよう命が下る。慈性門主は嵯峨御所大覚寺をこよなく愛され、この地を離れたくない想いを強く持たれていた。しかしながら、命に背くこともできずいよいよ江戸に出発の時、勅使門より出られましたが何度も何度も振り返られ、大覚寺に未練を残されたということから「おなごりの門」と呼ばれるようになったとのこと。詳しくは次をご覧ください。

https://www.daikakuji.or.jp/about/story_chokushimon/

大覚寺はその歴史が古いので、大覚寺にまつわる話が多いが、その中で、上記の「おなごりの門」の謂れと次の菅原道眞にまつわる話が代表的なものである。大覚寺にお参りの節は、まずは菅原道眞の祠にお参りしてほしい。菅原道眞の祠は上記の境内図では12番の天神島にある。



天神島にある菅原道眞の祠

菅原道眞にまつわる話は次を見ていただきたい。

https://www.daikakuji.or.jp/about/story_tenjinshima/

大覚寺では、春、夏、秋、冬、それぞれの四季ごとに行事が行われているが、その中で「観月の夕べ」は古い伝統的行事であり、京都の風物詩としてつとに有名である。日本三大名月鑑賞地というものがあるらしいが、大覚寺大沢池もその一つに選ばれているようだ。

毎年中秋の名月の夜には、大沢池にせり出すように作られた祭壇で満月法会が行われ、その読経の中、大沢池に龍頭鷁首舟が漕ぎ出され、煌々と輝く満月を楽しむことができる。

そのような「観月の夕べ」は、嵯峨天皇がここ大沢池にて中秋の名月に舟を浮かべ、文化人・貴族の方々と遊ばれたことから始まったと言われている。1200年もの歴史ある行事で、満月法会にあわせるかのように、大沢の池に龍頭鷁首舟が漕ぎ出されて、約15～20分かけてゆっくりと池を一周します。船の中でお抹茶もふるまわれます。

その様子は次をご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=dCvry9tiqac>



満月法会が行われる祭壇

(<http://tatsumo77.hatenablog.com/entry/2017/10/04/091202> による)

最近では、「大覚寺ウォータースクリーンプロジェクション」というイベントが行われている。幻想的でなかなか良いものです。

https://www.youtube.com/watch?v=h1OmB3kOu_c

大覚寺の大沢池は、鬼平犯科帳や暴れん坊将軍など時代劇のロケによく使われる。

最後に、白洲正子の「私の古寺巡礼」（2000年4月、講談社）に大覚寺のことが書かれ、大覚寺の「野仏」について次のように書いているので、紹介しておきたい。すなわち、

『 大覚寺の門前は、人だかりがしていたので、私は横の入り口から、大沢池へ直接行った。そこには人影もなく、池のふちにそって、左の方へ廻っていくと、おなじみの石仏群が並んでいる。これらの仏達は、いつ頃誰のために造られたか、何もわかっていない。時代は鎌倉と推定されているが、厚肉彫りのしっかりした彫刻は、[藤原彫刻](#)と言われても私は信じるであろう。昔は草むらの中に埋もれていたのが、今はきれいな竹垣をめぐらし、雨にぬれた石の肌が、ほのぼのと香るが如く煙っている。石仏を見るのは、雨の日に限ると思った。

